

自己志向的完全主義と責任性が情報収集行動に及ぼす影響

増井綾及・岩永 誠

広島大学大学院総合科学研究科

The effect of self-oriented perfectionism and responsibility on information gathering behavior

Ayano MASUI and Makoto IWANAGA

*Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University,
Higasi-Hiroshima 739-8521, Japan*

Abstract: The present study aimed to examine the effects of self-oriented perfectionism and responsibility on the information gathering behavior. Participants were divided into two groups on the basis of Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale (MSPS), that is, 21 for high- and 21 for low- perfectionism participants. They were asked to prepare a test by gathering information, which was designated as either important or unimportant sentences and either brief or detailed ones. Results were as follows. High perfectionists collected both of important information: they collected not only brief but also detailed sentences. High perfectionists under high responsibility condition collected unimportant information completely more than any other groups. Thus this finding indicates that self-oriented perfectionists under responsibility collect information excessively regardless of its importance.

Key Words: self-oriented perfectionism, responsibility, information gathering behavior

【序論】

日常生活において完全さや完璧さが求められる状況は多い。例えば、製品作りでは完璧さが求められるのは当然だろうし、試験の答案でもより完全なものほど成績が高い。このように、完全性を追求することは、正確な作業や成果を求める仕事や学業面では好ましいことと言われる。しかし、完全性を追求しすぎるあまりに不適応に陥ることもある。

自分自身に対して完全性を求める性格特性は自己志向的完全主義(self-oriented perfectionism: 以下SOPとする)と呼ばれる(Hewitt & Flett, 1991)。Hewitt & Flett(1991)は、自己に完全性を求める傾向が強い者ほど抑うつになりやすいことを見出している。しかし大谷・桜井(1994)は、自己に完全性を求める傾向が強い者ほど絶望感に陥りにくく、適応的であるという逆の結果を得ている。

こうした矛盾は、複数の下位因子から構成されるSOPを、単一の次元として扱っていることに問題があると考えられる。桜井・大谷(1997)は、SOPの下位特性として、「完全でありたいという欲求(以下、完全欲求とする)」、「自分に高い目標を課する傾向(以下、高目標設定とする)」、「ミス

(失敗)を過度に気にする傾向(以下、失敗過敏とする)、「行動に漠然とした疑いをもつ傾向(以下、行動疑念とする)」を挙げている。これらの下位特性のうち、抑うつや絶望感に結びついているのは失敗過敏傾向であり、高目標設定傾向は逆に抑うつや絶望感を低減することを明らかにしている(桜井・大谷, 1997)。またBrown, Heimberg, Frost, Makris, Juster, & Leung(1999)は、高目標設定傾向が高い者ほど学業場面においてより高い目標を自分自身に課して勉強し、良い成績を得ることを明らかにしている。それに対し、失敗過敏傾向が高い者ほどテストを不安に感じ、高目標設定傾向の高い者と同様によく勉強するにもかかわらず、試験成績に結びつかないことも明らかにしている。つまり、これまでの矛盾は、心身の健康に関連する因子と不適応に関連する因子を混在したまま検討がなされてきたからだと考えられる(桜井・大谷, 1997)。

しかし相関研究では、SOP者の不適応性を明らかにするには問題がある。元気のあるときには自分に高い目標を課すが、落ち込んでいるときにはミス心配するというように、日常では状況に応じて異なる認知が生じるからである(小堀・丹野, 2004)。そのため、下位因子の平均的傾向からSOP者の不適応性を明らかにするには限界がある。

そこで近年では、特定の状況においてSOP者の示す認知・行動的不適応に着目した研究が行われている(Flett, Hewitt, Blankstein, & Gray, 1998; 小堀・丹野, 2004)。小堀・丹野(2004)はSOPを安定したセルフ・スキーマとして捉え、完全性を求める「完全性追及」、高い目標を設定しようとする「高目標設置」、そしてミスを気にする「ミスへのとらわれ」という3種類の完全主義的認知が存在する考えた。それらの完全主義的認知の働きやすい状況の1つに課題解決のための情報収集状況がある。

Kobori & Tanno(2008)や劔持(2005)は、確率推論課題を用いてSOP者の情報収集行動を検討した結果、SOP者は非SOP者と比べ多くの情報を収集することを見出している。また石田(2005)は大学生を対象に、特定テーマに関する情報を収集させ、

その後そのテーマに関する試験を実施した。準備された情報は2種類で、1つは全て集めておけば試験で高得点がとれる重要性の高い情報であり、もう1つが重要性の低い情報である。実験参加者が必要であると判断した情報は保存することができ、試験の際に見ることができると教示した。重要性の高い情報の収集数において、SOP者と非SOP者との間に違いは認められなかった。しかし、SOP者は重要性の低い情報も多く収集し、試験の成績が悪いことが示された。つまり、SOP者は不必要な情報を多く収集することで、かえってパフォーマンスを低下させることになったのである。

限られた時間の中で必要のない情報までも集めれば、その努力に見合うだけの成績を上げることができないことがわかっている。何故SOP者は情報を集め続けるのだろうか。石田(2005)は、この現象を制御ミスの観点から説明し、完全主義者の情報収集過程を、「目標の達成に向けた行動の制御には成功しているが、その認知過程およびそれを反映する方略が不適応的、非生産的なために思い通りの結果を得ることができない現象」とみなしている。完全主義者は、多くの情報を収集する中で別のことが気になり始め、それに関する新たな情報を収集するという悪循環に陥るのではないかと考えられるのである。しかし重要性の低い情報を多く収集しているSOP者の行動は、目標の達成に向けた制御された行動とは言い難い。目標を達成するためならば、重要性の高い情報のみを収集すればよいはずである。そのため、SOP者の情報収集行動を、認知過程および採用方略の不適切性による制御ミスの観点から説明するには無理がある。

情報収集行動の無駄がわかっているにもかかわらず行ってしまうというSOP者の抱える行動の制御上の歪みは、強迫性障害に見られる強迫性症状と類似している。重要ではないとわかっているにもかかわらず多くの重要でない情報を収集せざるを得ない(石田, 2005)というSOP者の情報収集行動は、強迫的とも言えるからである。また、強迫性障害とSOPは同じではないものの、SOPの下位概念と強迫性障害の症状に共通性が見いだせるからである

(Frost, Marten, Lahart, & Rosenblate, 1990). そこで本研究は、強迫性障害の規定要因がSOP者の情報収集行動に関連しているのではないかと仮定した検討を行う。

Salkovskis(1985)の強迫性障害の認知モデルによると、強迫行為を引き起こす主要因は事態に対する自己の責任性だとされている。責任性とは、事態に対する自分の影響力の過大視と事態の深刻さの過大視からなる(Ladouceur, Rhéaume, Freeston, Aublet, Jean, Lachance, Langlois, & De Pokomandy-Morin, 1995; Salkovskis, 1996; 杉浦, 1996)。これらの過大視が強迫行動を引き起こすのである。

SOP者が置かれた状況の責任性を高く評価するのであれば、強迫行動同様、不必要だとわかっていても重要ではない情報も多く収集しようとする行動が助長されることになる。さらに、自分の行動によって生じた深刻な事態は他者にも影響を及ぼしかねないことから、SOP者にとって他者の存在は、自分自身の完全性評価に関係すると予想される。SOPが罪悪感などの他者の存在を意識した自己意識的感情と関連していること(Tangney, 2002; 齋藤, 2009)、また桜井・大谷(1997)の新完全主義尺度の質問項目には他者を意識した項目が含まれていることも、他者へ被害が及ぶかもしれないという評価が、SOP者の責任性認知を高めることに結びつくと考えられる。このように、SOP者は自分の起こしたネガティブな出来事が他者に被害を及ぼすことについて、自己に責任があると評価しやすいために(Bouchard, Rhéaume, & Ladouceur, 1999)、過剰な情報収集に結びつくことが予想される。SOP者が事態に対する自分の影響力と事態の深刻さを過大視する結果、不必要な情報をも強迫的に収集することになると考えられる。

よって本研究では、責任性の有無がSOP者の示す情報収集行動に及ぼす影響について検討することを目的とした。石田(2005)は収集する情報の重要度の検討は行っているものの、情報の詳細さにより情報収集行動に認められる影響についての検討は行っていない。日常の課題解決場面では、対象とする課題についてどの程度詳細に調べたかがその成果に影響することから、調べる情報の詳細さは重要な意味を持つ。そのため、本研究では、

SOP者が責任状況でより詳細情報を収集しようとするのかについても合わせて検討することとした。SOP者は完全性を追求するために、重要な情報であれば短い情報だけではなく詳細情報も収集すると考えられる。

仮説①：SOP傾向の高い者は、責任性の高い状況で重要な情報をより多く収集するだろう。

仮説②：SOP傾向の高い者は、責任性の高い状況で収集する重要情報において、詳細情報も多く収集するだろう。

仮説③：SOP傾向の高い者は、責任性の高い状況で重要ではない情報もより多く収集するだろう。

【方法】

実験デザイン SOP(SOP低・高：参加者間)×責任性操作(なし・あり：参加者間)の2要因の完全無作為化法によって行われた。

実験参加者 臨床心理学を専攻する大学生241名に対して新完全主義尺度(桜井・大谷, 1997)を実施し、実験協力を承諾した42名(男性10名, 女性32名)を実験参加者として用いた。同尺度の平均得点75.1点以上の21名(男性7名, 女性14名; $M=85.0$)をSOP高群とし、そのうち10名に責任性の操作を行った。また平均得点以下の21名(男性3名, 女性18名; $M=66.2$)をSOP低群とし、そのうち11名に責任性の操作を行った。なお、平均SOP得点の差は有意であった($t(40)=9.34, p<.01$)。また各条件群への割り当ては、SOP低群・責任性なし条件10名(男性2名, 女性8名; $M=22.8\pm 4.32$ 歳), SOP低群・責任性あり条件11名(男性5名, 女性6名; $M=21.5\pm 0.93$ 歳), SOP高群・責任性なし条件11名(男性2名, 女性9名; $M=21.1\pm 1.14$ 歳), SOP高群・責任性あり条件10名(男性1名, 女性9名; $M=21.1\pm 1.66$ 歳)であった。

実験課題 制限時間20分間以内に、キーワードに関する試験に備えて情報収集する課題を用いた。なお、実験参加者の課題への関心や動機づけを高めるため、キーワードは発達心理学のキーワード(子安・二宮, 2004)を用いた。

用いたキーワードは20種類で、同じキーワード

の書かれた2種類のプリントを実験参加者に配布し、テストを受けるのに必要だと判断した情報を用紙に手書きで転記させた。情報の詳細さが収集行動に影響するかを検討するため、同一情報について2種類の情報を準備した。1つはキーワードあたり72.9(±4.0)文字の短い情報を記載し、もう1つは175.1(±12.5)文字の詳細情報を記載した。各リストに共通する4つのキーワードを重要情報とし、短い情報のプリントに記載されている内容を書き写せば十分な得点が取れると教示した。これら4個のキーワードの説明は赤色の文字で書かれてあり、重要ではない情報と区別できるようにした。詳細情報における重要情報については、必要以上の詳細さで記述されていたため、黒色で印刷した。

手書きで情報を転記させたのは、実験参加者にある程度の労力を伴わせるためである。先行研究(石田, 2005)では、パソコン上に呈示されている情報の中から入手したいと思う情報をクリックすることで入手・収集ができるようにしていた。この方法は簡単に行えるため、とりあえず情報を集めることも可能である。そのため、完全性とは無関係に情報を集める可能性もあるため、労力を伴う手書きでの転記という方法を用いたのである。

責任性の操作

自他に深刻な被害が及ぶ場合に責任性を感じやすいことから(Ladouceur, Rhéaume, & Aublet, 1997)、責任性の操作には、自分の成績の低さが被害を及ぼす状況を設定した。責任性あり条件では「自分のテストの成績により自分と他3名の実験参加者への報酬が半減する」という教示を行い、責任性を高めた。責任性なし条件では、責任性の付与は行わず、あくまでも個人の作業であると教示した。

手続き 実験前日までに実験参加者に対して本研究の目的および所要時間などを説明し、実験協力への同意を得た。

実験は個別に行った。実験当日、実験内容の概要、所要時間などを説明し、改めて実験協力への同意を得た。その後、実験課題についての教示を行い、試験の出題範囲の情報を記載したプリント2種類と、情報を書き写すための筆記用具および白紙を渡した。プリントに記載されている情報に

ついては実験参加者に一度口頭で説明した。一通りの実験の説明が終了した際に確認のために要約したプリントを配布し、もう一度教示した。情報収集の時間は20分間で、その間実験者は部屋から退室した。

情報収集後、情報収集中の認知等に関する質問紙に回答させた後、デブリーフィングを行い、実験を終了した。

指標

責任性：責任性の操作の確認をするため、「事態に対する個人的影響(以下個人的影響とする)」および「事態の深刻さ(以下深刻さとする)」について、リッカート法10件法(1 - 10)で評定させた。

情報収集：各キーワードの説明文章は、あらかじめ3要素に分けることができるよう作られていた。例えば社会化の場合、「①生物学的存在のヒトが、②所属する社会の中で重要とされる信念を獲得し、③社会・文化的存在へと移行すること」となっていた。転記された内容から、いくつの要素が収集されているかを求めた。情報の3つ全ての要素が転記されてある場合を完全に収集した情報とした。一部分のみが転記されてある場合を部分的に収集した情報とした。また、完全に収集した情報と部分的に収集した情報を足したものを、総収集情報とした。

分析 情報の重要性ごとに、短い情報と詳細情報を合わせて分析を行った。重要情報の場合、短い情報4個と詳細情報4個ののべ8個中の総収集情報および完全に収集した情報、部分的に収集した情報の収集数を求めた。非重要情報についても同様にして分析した。

分散分析 責任性評定および情報収集数についてSOP(低・高：参加者間)×責任性(なし・あり：参加者間)の2要因の分散分析を行った。下位検定にはBonferroni法を用いた。

なお、責任性の操作が上手くいかなかった5名および課題を理解していなかった2名を除いた35名を対象に分析を行った。各条件群の人数は、SOP低群・責任性なし条件7名(男性2名、女性5名)、SOP低群・責任性あり条件11名(男性5名、女性6名)、SOP高群・責任性あり条件11名(男性2名、女性9名)、SOP高群・責任性あり条件6名(男性1名、女性5名)

であった。

【結果】

責任性の操作の確認

Fig. 1は、各条件群の個人的影響の平均得点を示したものである。個人的影響については、責任性の主効果が認められ($F(3,31)=6.83, p<.05, \eta^2=.18$)、責任性あり条件が責任性なし条件と比べ、個人的影響が高いことが示された。しかし、SOPの主効果($F(3,31)=0.74, n.s.$)およびSOPと責任性の交互作用($F(3,31)=1.75, n.s.$)は認められなかった。

Fig. 2は、各条件群の深刻さの平均得点を示したものである。SOPの主効果が認められ($F(3,31)=9.41, p<.01, \eta^2=.23$)、SOP高群がSOP低群と比べ、深刻であったことが示された。また、責任性の主効果が認められ($F(3,31)=7.13, p<.01, \eta^2=.19$)、責任性あり条件が責任性なし条件と比べ、深刻であったことが示された。しかし、SOPと責任性の交互作用は認められなかった($F(3,31)=0.00, n.s.$)。

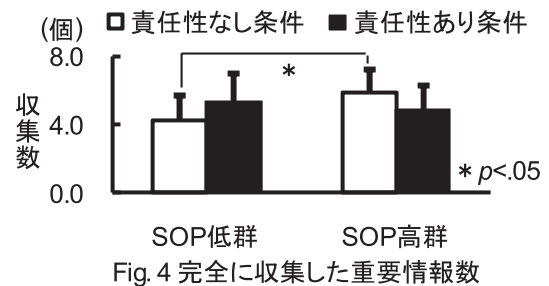
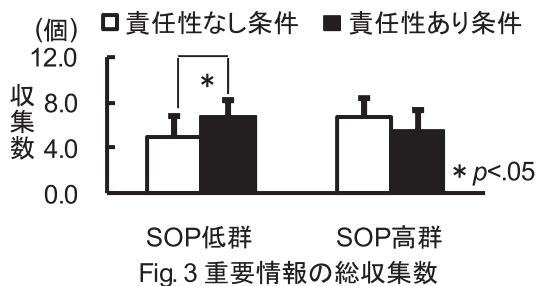
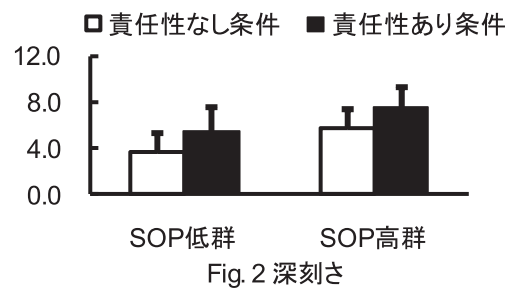
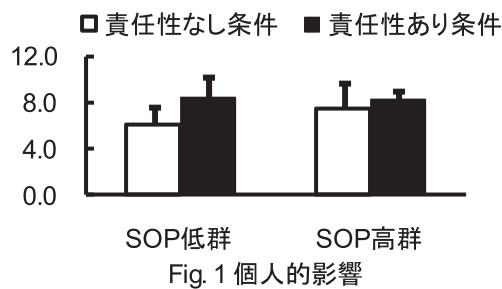
以上の結果より、責任性操作の責任性評価への影響は認められた。SOPと責任性操作の責任性評価への交互作用は認められなかったものの、責任性操作は概ね妥当であったと考えられる。

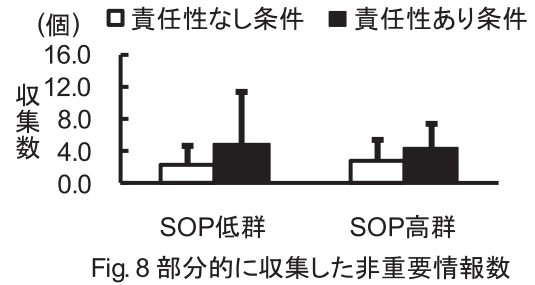
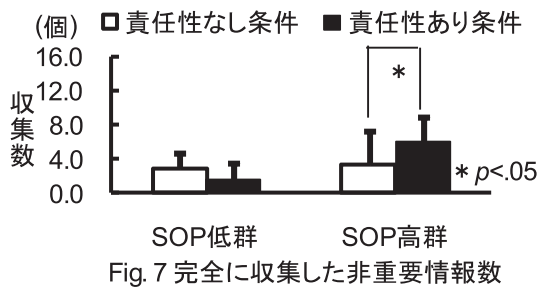
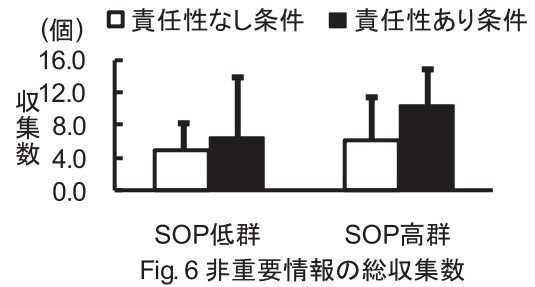
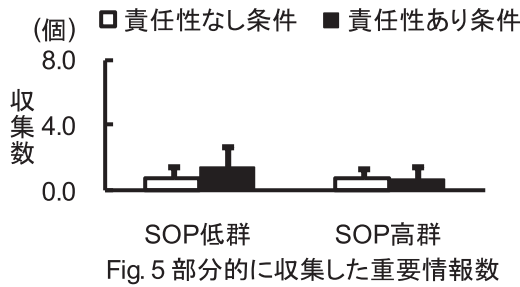
SOPと責任性の重要情報の収集への影響

Fig. 3は、各条件の収集した重要情報の総収集数を示したものである。SOPと責任性の交互作用が認められ($F(3,31)=5.49, p<.05, \eta^2=.15$)、下位検定を行ったところSOP低群において責任性あり条件が責任性なし条件と比べ、重要情報の収集数が多いことが明らかになった($p<.05$)。しかし、SOPの主効果($F(3,31)=0.11, n.s.$)、および責任性の主効果($F(3,31)=0.23, n.s.$)は認められなかった。

Fig. 4は、各条件群の完全に収集した重要情報数を示したものである。SOPと責任性の交互作用が認められ($F(3,31)=4.20, p<.05, \eta^2=.12$)、下位検定を行ったところ責任性なし条件においてSOP高群がSOP低群と比べ完全に収集した重要情報数が多かった($p<.05$)。しかし、SOPの主効果($F(3,31)=1.08, n.s.$)、および責任性の主効果($F(3,31)=0.00, n.s.$)は認められなかった。

Fig. 5は、各条件群の部分的に収集した重要情報の平均数を示したものである。SOPの主効果($F(3,31)=1.00, n.s.$)、責任性の主効果($F(3,31)=0.74, n.s.$)、SOPと責任性の交互作用($F(3,31)=1.08, n.s.$)のいずれも有意ではなかった。従って、部分的に収集した重要情報数には条件の違いはないといえよう。





SOPと責任性の非重要情報の収集への影響

Fig. 6は、各条件の収集した非重要情報の総収集数を示したものである。SOPの主効果($F(3,31)=1.48, n.s.$)、責任性の主効果($F(3,31)=1.95, n.s.$)、SOPと責任性の交互作用($F(3,31)=0.47, n.s.$)のいずれも有意差は認められなかった。従って、非重要情報の総収集数には条件の違いはないといえよう。

Fig. 7は、各条件群の完全に収集した非重要情報数を示したものである。SOPの主効果が認められ($F(3,31)=5.80, p<.05, \eta^2=.16$)、SOP高群がSOP低群と比べ完全に収集した非重要情報数が多いことが示された。SOPと責任性の交互作用は有意傾向であり($F(3,31)=3.64, p<.10, \eta^2=.11$)、下位検定を行ったところSOP高群において責任性あり条件が責任性なし条件と比べ完全に収集した非重要情報数が多いことが示された($p<.05$)。しかし、責任性の主効果は認められなかった($F(3,31)=0.49, n.s.$)。

Fig. 8は、各条件群の部分的に収集した非重要情報数を示したものである。SOPの主効果($F(3,31)=0.00, n.s.$)、責任性の主効果($F(3,31)=1.98, n.s.$)、およびSOPと責任性の交互作用($F(3,31)=0.12, n.s.$)のいずれも有意ではなかった。従って、部分的に収集した非重要情報数には条件の違いはないといえよう。

【考察】

本研究の目的は、責任性の有無がSOP者の示す情報収集行動に及ぼす影響について検討することであった。

SOPと責任性の情報収集行動への影響

重要情報に関しては、総収集数についてはSOP低群において責任性あり条件が責任性なし条件と比べ多く収集していた。特にSOP高群は責任性操作の有無に関係なく、重要な情報を4個以上収集し、短い情報だけではなく詳細情報も収集していることがわかった。また、完全に収集した重要情報の数について、責任性なし条件においてSOP高群がSOP低群と比べ多く収集していた。統計的に有意な差は認められなかったものの、SOP高群において責任性あり条件が責任性なし条件よりも収集した重要情報の数が少なかった。以上の結果より、責任性の高い状況でSOP高群が重要情報を多く収集するという仮説①、及びSOP高群は詳細情報も多く収集するという仮説②は支持されなかった。

一方、非重要情報については、総収集数においては条件群で差が認められなかった。しかし、完全に収集した非重要情報数においてはSOP高群がSOP低群と比べて多く収集していた。また、SOP

高群において責任性あり条件が責任性なし条件と比べて多く収集していた。以上の結果より、SOP高群は責任性の高い状況で重要ではない情報も多く収集するという仮説③は支持されたといえる。

重要情報の総収集数についてSOP低群において責任性あり条件が責任性なし条件よりも多かったことから、責任性を付与されることが強迫的な情報収集行動を引き起こしたものと考えられる。この結果は先行研究(Ladouceur et al., 1997)と一致するものである。責任性が付与されることによって、強迫性障害に見られる強迫症状のように、情報収集の面においても行動の制御に歪みが生じることが示されたといえる。

また、SOP高群は重要な情報を4個以上収集した、すなわち短い情報だけではなく詳細情報も収集していたことが示された。このことは、同じキーワードについて重複した情報であっても、SOP者は収集していたことになる。すなわち、SOP者は重要な情報を収集する際、必要以上に関連情報も求める傾向にあることを示したものと見える。重要な事柄について詳しく調べることは、本来パフォーマンスの向上につながるが、同じ事柄についての情報を重複して収集することは無駄であり、パフォーマンスの向上に結びつかない。こうした行動を示したのは、石田(2005)が指摘するように、問題を解決するために情報を集めたにも関わらず、新たな疑問が生じたためにさらなる情報を収集することになった可能性を指摘することができる。また、責任性なし条件であっても、SOP高群がSOP低群と比べ完全に収集した重要な情報量が多かったことから、説明されている内容を漏らさずに収集するというSOP者の情報収集方略が示されたと考えられる。まとめると、SOP者には重要な情報について必要以上に多くかつ詳細に情報を収集する傾向のあることが示された。

SOP高群において、責任性が高いと情報収集量が増え、また無駄な情報も収集すると仮説を立てたが、仮説は支持されなかった。むしろ有意な差は認められなかったものの、SOP高群において責任性あり条件が責任性なし条件と比べて収集した重要情報の数が少ないという逆の傾向が認められた。こうした結果が得られた理由として以下の4

点が考えられる。

第一に、責任性の操作の問題が挙げられる。本実験では、自分の成績が悪ければ、仲間の得られる報酬が半減するという教示を用いて責任性の操作をした。しかし、責任性の下位要因である個人的影響について、SOP高群の責任性あり条件と責任性なし条件間で差が認められなかった。完全主義者は自己の個人的影響を高く評価する傾向があることから(Bouchard et al., 1999)、責任性の操作に関係なく、SOP者は課題成績に対する自己の影響力を過大視した可能性がある。そのため、両条件群における責任性評価に天井効果が生じ、個人的影響についての条件差が認められなかったと考えられる。そのため、情報収集量に責任性の違いが認められなかったと考えられるのである。

第二に、重要情報の収集時間と重要ではない情報の収集時間にトレードオフが生じた可能性がある。本研究では情報を重要情報と重要ではない情報の2種類を設定した。責任性あり条件のSOP高群は、重要情報だけではなく、重要ではない情報も多く収集していた。時間が限られている状況で、重要ではない情報も多くかつ正確に収集しようとすれば、重要情報を収集するのに割く時間が少なくなる。その結果、責任性あり条件のSOP高群が収集する重要情報数が、抑制されたものと考えられる。

第三に、責任性が付与されることによってSOP者が過度に緊張する可能性もある。本実験では、転記によって情報を収集させたわけであるが、責任性が付与されることによりSOP高群は過度に緊張したため、情報処理が阻害されて転記速度が低下した可能性もある。転記を行うという作業時の緊張の程度についても測定し、課題遂行を妨害する要因との関連も合わせて検討していく必要がある。

第四に、各条件群の実験参加者の人数が挙げられる。本実験では責任性操作の問題や課題が適切に理解されなかったために、分析に用いた実験参加者数はかなり少なくなった。特に、SOP高群の責任性あり条件の実験参加者はSOP高群の責任性なし条件の実験参加者と比べ少なかった。その結果、データが安定せず、仮説とは逆の結果となっ

た可能性が考えられる。今後はさらにデータ数を増やして検討する必要がある。

非重要情報についても、SOP者が多くの情報を収集する傾向が認められた。この結果は、先行研究(Kobori & Tanno, 2008; 剣持, 2005; 石田, 2005)と一致したものであった。また有意差は認められなかったものの、責任性あり条件のSOP高群において責任性が最も高く評価されていた。このことから、責任性の認知がSOP者の情報収集行動の媒介要因となっていると考えられる。強迫性障害の症状と同様に、責任性が付与されることによって、不必要な情報を多く収集するSOP者の行動が助長されたといえよう。

強迫性障害と同様のメカニズムでSOP者が情報収集をするのであれば、情報収集することで不安が解消され、自分の責任性の評価は下がるはずである。しかし実際には、限られた時間内で、重要ではない情報も多く収集してしまい、重要な情報の収集ができていない。つまり、うまく情報収集ができていないために、それがさらに責任性を強く実感させることに繋がっているのではないかと考えられる。つまり、SOP者が責任性を強く認知することと情報収集行動とに循環的關係が存在し、悪化への悪循環が生じていると予想できる。

重要ではない情報を収集する中で、収集した情報の内容についてSOP者は新たな疑問を抱く可能性が指摘されている(石田, 2005)。このことから、SOP者が課題に対して取り組みば取り組むほど、その課題について疑念を抱くことになり、さらに情報を収集しなければならないと考えてしまう可能性も考えられる。そのため、SOP者が情報収集した後の責任性の認知や課題に対する解決感や疑念などについてもあわせて検討し、SOP者の行動特徴を明らかにする必要がある。

【今後の課題】

本研究の問題点として、以下の3点が挙げられる。第一に課題設定と情報収集方法の問題である。本研究の実験参加者は心理学を専攻する大学生であり、かつ、本研究で収集させた情報も心理学領域のものであった。そのため、既に知っている情報を集めなかったのではないだろうか。本研究では、手書きによる転記という負担のかかる方法で情報を収集させたことから、既に知っている情報については手間をかけて収集することはしなかった可能性がある。異なる専門領域での情報収集を行わせる方が良かったのではないかと思われる。第二に情報収集時間の設定上の問題である。本研究では情報収集時間を20分に設定した。しかし、完全主義者は非完全主義者と比べ、試験勉強に費やす予定の時間が長いという報告(Bieling, Israeli, Smith, & Antony, 2003)がなされていることから、SOP者が満足するまで情報収集をさせた際にかかる時間や労力を測定する方が、SOPの特徴をより反映させた検討ができるのではないかと思われる。今後は、1, 2週間といった長い期間を設け、収集した情報量や収集時間を検討する必要がある。第三に、責任性の操作が挙げられる。本研究では行動の制御上の歪みという類似性から、強迫性障害の規定要因がSOP者の情報収集行動と関連していると想定した検討を行った。事態に対する自己の個人的影響を完全主義者は高く評価しやすい(Bouchard et al., 1999)ものの、他者への責任性をどの程度重要視するのかは明らかではない。そのため、他者に対する責任性がどの程度妥当な操作であったかについては、検討の余地が残る。今後は、自己志向的な責任性の操作の可能性について検討する必要がある。

【引用文献】

- Bieling, P. J., Israeli, A., Smith, J., & Antony, M. M. (2003). Making the grade: the behavioural consequences of perfectionism in the classroom. *Personality and Individual Differences*, *35*, 163-178.
- Bouchard, C., Rhéaume, J., & Ladouceur, R. (1999). Responsibility and perfectionism in OCD: An experimental study. *Behaviour Research and Therapy*, *37*, 239-248.
- Brown, E. J., Heimberg, R. G., Frost, R. O., Makris, G. S., Juster, H. R., & Leung, A. W. (1999). Relationship of perfectionism to affect, expectations, attributions and performance in the classroom. *Journal of Social and*

- Clinical Psychology*, **18**, 98-120.
- Flett, G. L., Hewitt, P. L., Blankstein, K. R., & Gray, L. (1998). Psychological distress and the frequency of perfectionistic thinking. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1363-1381.
- Frost, R. O., Marten, P., Lahart, C., & Rosenblate, R. (1990). The dimensions of perfectionism. *Cognitive Therapy and Research*, **14**, 449-468.
- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1991). Perfectionism in the self and social contexts: Conceptualization, assessment, and association with psychopathology. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 456-470.
- 石田裕昭 (2005). 大学生の完全主義傾向と課題解決方略の非効率性：なぜ彼らの努力は報われないのか 社会心理学研究, **20**, 208-215.
- 剣持慈子 (2005). 完全主義における強迫的行為としての不決断傾向 日本パーソナリティ心理学会第14回大会発表論文集, 155-156.
- 小堀修・丹野義彦 (2004). 完全主義の認知を多次元で測定する尺度作成の試み パーソナリティ研究, **13**, 34-43.
- Kobori, O., & Tanno, Y. (2008). Self-oriented perfectionism and information gathering behaviour. *Australian Journal of Psychology*, **60**, 26-30.
- 子安増生・二宮克美 (2004). キーワードコレクション 発達心理学[改訂版] 親曜社
- Ladouceur, R., Rhéaume, J., & Aublet, F. (1997). Excessive responsibility in obsessional concerns: A fine-grained experimental analysis. *Behaviour Research and Therapy*, **35**, 423-427.
- Ladouceur, R., Rhéaume, J., Freeston, M. H., Aublet, F., Jean, K., Lachance, S., Langlois, F., & De Pokomandy-Morin, K. (1995). Experimental manipulations of responsibility: An analogue test for models of obsessive-compulsive disorder. *Behaviour Research and Therapy*, **33**, 937-946.
- 大谷佳子・桜井茂男 (1994). 完全主義の構造と役割(I) ——抑うつ傾向および絶望感との関係—— 日本心理学会第58回大会発表論文集, **92**.
- 桜井茂男・大谷佳子 (1997). “自己に求める完全主義” と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, **68**, 179-186.
- 齋藤路子・今野裕之 (2009). ネガティブな反すと自己意識的感情および自己志向的完全主義との関連の検討 パーソナリティ研究, **18**, 64-66.
- Salkovskis, P. M. (1985). Obsessional-compulsive problems: A cognitive-behavioural analysis. *Behaviour Research and Therapy*, **23**, 571-583.
- Salkovskis, P. M. (1996). Cognitive-behavioural approaches to the understanding of obsessional problems. In R. M. Rapee (Ed.), *Current controversies in the anxiety disorders*. New York: Guilford. pp. 103-133.
- 杉浦義典 (1996). 強迫性障害への認知行動アプローチ ——概観と展望 東京大学大学院教育学研究科紀要, **36**, 331-339.
- Tangney, J. P. (2002). Perfectionism and the self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride. In G. L. Flett & P. L. Hewitt (Eds.), *Perfectionism: Theory, research and treatment*. Washington, DC: American Psychological Association. pp. 199-215.